郡山東高校　修学旅行通信　その 10　　2022 年 10 月 3 日　発行

はんなり　～京都：清水寺編～

京都観光の定番「清水寺」には、サビの「舞台」に至る序曲がちゃんとある。バスを降りて参道に出ると、緩やかに曲がった坂道、両側には庶民的なおみやげ屋さんがひしめいている。清水ならでは唐辛子や清水焼からアーミーグッズまで何でも売っている。そんな参道には「二寧坂」「三寧坂」などの名前が付けられている。「二寧坂」で転んだら 2 年以内に、「三寧坂」で転んだら 3 年以内に災いが起こるという云われに由来している。



店先を冷やかしながらだらだら歩くうちに、最後のカーブで視界がぱっと開ける。そこに仁王門が現れた。仁王門では、「阿形」と「吽形」一対の仁王様が、欲にまみれた邪悪な観光客を戒めんばかりに待ち構えている。ところで、この仁王様の脇にいる守護獣スフィンクス、否、狛犬は、普通とちょっと違っている。一般には口を開けた「阿形」と、口を閉じた「吽形」で一対だが、清水の狛犬は、お釈迦さまの教えを大声で世に知らしめるために、両方とも「阿形」をしていると言われている。



仁王門をくぐると、三重塔がそびえ立つ。しかし、まだあの舞台は見えない。餌を待たされる飼い犬のように、その効果は大きい。背景の山が、ちょうどいい借景みたいになっている。よく練られた交響曲みたいに、そう、まるでヨハンシュトラウスのように心地よい。目を上に向けると、塔の各層の屋根の四隅に厄除けの鬼瓦が見える。しかし、東南角だけは、鬼とは顔が違う。京都は火伏せの神が鎮座する愛宕山が西北を守ってくれているが、反対側の東南が弱点。そこで、東南角は厄除けよりも火除けの龍神が置かれている。



右を見ているうちに、前に現れてきたのが開山堂。別名「田村堂」。清水寺創建の大本願である坂上田村麻呂公夫妻の像を、堂内中央の須弥壇上の厨子内にお祀りしている。ちなみに、郡山市内の守山にも田村麻呂を祀る「田村神社」がある。その田村神社の由来によると、田村麻呂は郡山市徳定（日大東北高校の辺り）の生まれだとか。すると、どうだろう。高校生まで郡山市内で育った田村麻呂青年は、京都の大学に入学し、そのまま都で防衛省の国家公務員となり、故郷に錦を飾るべく征夷大将軍となって、この地の鬼どもを退治してくれたというのか。その辺の事情については後述に任せるとして、いよいよ本堂、曲はクライマックスに。

その前に、心身を清めておこう。ちょうど、門の前に手水鉢がある。梟の胴体をもった龍が、私たちの穢れを禊いでくれる。その轟門両側の、東を護る「持国天」、西を護る「広目天」、それぞれに挨拶をして、門をくぐるとそこは神聖な世界。すぐに、舞台へと飛び出たいところだが、まずは、本堂にお参り。

本堂の建物は、寛永 10 年（1633）の徳川家光による再建だが、優美な曲線を見せる寄棟造り、檜皮葺の屋根や軒下の蔀戸など、平安時代の宮殿や貴族の邸宅の面影を今に伝えてくれる。また、堂内は、巨大な丸柱の列によって外陣と内陣、内々陣の三つに分かれていて、内々陣のご本尊「十一面千手観音」は秘仏のため、次回ご開帳の 2033 年まで拝顔することはできない。しかし、そこはサービス満点の清水寺。外陣から直径 2m の懸仏を拝



観することによって、そのお顔を透観できるシステムになっている。気は焦るが、その前に、重さ 90kg の「弁慶の大錫杖」を持ち上げる観光旅行定番のアトラクションに挑戦し、腹黒いばかりか顔も真っ黒の「出世大黒さん」に願い事を聞き届けて貰おう。

とうとう最終楽章の「清水の舞台」。「清水の舞台から飛び降りる」という言葉が残っているくらいだから、当然、京都の町並みを見下ろすことができる絶景ポイントでもある。そこに立つと、「清水の舞台から飛び降りる」という言葉の真の意味さが伝わってくる。その意味は、「必死」というよりも「無謀」という方がふさわしい。この舞台、元々は能や狂言、舞楽を奉納する本当の舞台で、実際、両脇に雅楽を演奏する席もある。ただ、普通、舞台は観客が見るつくりになっているけど、ここは、仏様が見るようにつくられた舞台だから客席はない。ビル 4 階建てに相当する舞台の高さは、「奥の院」から見るとよく分かる。舞台を支える欅は最長 12m。これを 1 本の釘も使わずに組み合わせた。日本の職人技、畏るべし。世界遺産登録も頷ける。奥の院を降りると、清水寺の開創の起源であり、“清水”の由来となった「音羽の滝」がある。鴨川の地下伏流水が東山断層の割目から噴出したものが水源で、それに音羽山の雨水が加わり、滝に流れ落ちているとのこと。ところで、この滝の三筋の水には、それぞれにご利益が伝わっていて、滝に向かって左が学問成就、真ん中が恋愛成就、右が延命長寿の水。どれかひとつだけ選んで、一口だけ口にするのが正しい作法。いくつも選ぶと、どの願い事も叶わなくなってしまう。何口も飲むとそのご利益は、2 分の 1、3 分の 1 になる。何事も欲張ってはいけないとの戒めがこめられている。この滝、今は行列ができるほどの人気の場所だが、元は瀧行の場だった。宝亀 11 年（780）、坂上田村麻呂が、この滝で修行している延鎮（≒円珍）に出会った。田村麻呂公は鹿狩りに上山した旨を話すと、観音霊地での殺生を戒められ、観世音菩薩の教えを諭された。深く感銘を受けた田村麻呂は、仏法に帰依し、十一面千手観音像を本尊として安置したという。



田村麻呂は、蝦夷征討の際にも必勝祈願に清水寺を訪れ、延鎮から小さい駒の木像を 100 体受け取った。すると、田村麻呂が戦場で苦戦を強いられていた時、どこからともなく 100 人の騎馬隊が現れて、敵を倒し去っていった。その後、村人がそこで汗びっしょりの木駒を見つけた。清水寺の 100 体の木駒の話を知っていた近所の智者が残りの 99 体の駒を作って 100 体としたが、いつの間にかまた 1 匹が行方知れずになった。今の「三春駒」はその 99 匹の子孫で、それで遊ぶと子どもたちは健やかに成長するとの言い伝えを生んだ。ちなみに、この蝦夷征討に際し、阿弖流為（あてるい）と母禮（もれ）ら 500 人余りの蝦夷が投降してきた。田村麻呂は首領 2 人を都まで連れて戻り、都は祝賀一色の雰囲気に包まれた。田村麻呂は 2 人の釈放を求めたが、桓武天皇の下した結論は斬首。「音羽の滝」の下には、この阿弖流為と母禮の霊を弔う石碑がある。東北人として、この碑に手を合わさずには、帰れまい。



最後に、この清水寺の奥には、縁結びで有名な「地主（じしゅ）神社」がある。実は、多くの観光客の目当てが「清水の舞台」ではなく、この神社だとも言う。境内には、イランやハンガリーからの良縁御礼の御札が飾ってある。なんと国際的なパワースポット。まあ、質実剛健の君たちには関係のないところではあるが、紹介だけしておこう。

